

ヴェルナー・ハーマツハー

エクス・テンポレ

カントにおける表象 (Vorstellung) としての時間 (下)

宮崎裕助・清水一浩 訳

Werner Hamacher

Ex tempore – Zeit als Vorstellung bei Kant

(II)

Übersetzt von
Yusuke MIYAZAKI
Kazuhiro SHIMIZU

In: *Politik der Vorstellung*

Herausgegeben von Joachim Gerstmeier und Nikolaus Müller-Schöll

Verlag Theater der Zeit: München 2006, S. 81-94

あらゆる崇高化以前にあるこの崇高なものの経験のなかでも、もつとも基本的な経験は、時間測定という意味での——そのかぎりでは時間発生という意味での——時間規定の経験である。『判断力批判』の「崇高なものの判定における適意の質について」という節〔第二七節〕で、カントは、空間の把握 (apprehensio) を前進として説明している。この前進は潜在的には無限なものなので、なおも表象の構造に一致しうるためには、ひとつの直観という単一性〔単位〕への総括 (comprehensio) を必要としている〔KdU, B 87 [251-252]〕。そのさう「直観の単一性」が意味しているのは、およそ直観が直観でありうるかどうかそれが即して決定されるような量である。そして直観における表象の単一性は、ひとつの瞬間とカントが呼ぶ当のものである。この瞬間は背進を通じてのみ獲得される。継起するもろもろの時間契機は、背進において逆向きに——つまり再生産の作用と、それに伴う再認の作用とにおいて——見晴るかされ、総括されることで、同時存在という状態でイメージとなって眼前に据えられるからである。しかしこの同時存在が得られるときには、カントが時間条件とも呼んでいる時間形式、すなわち継起関係は廃棄されてしまう。カントはこう書いている。

ある空間の測定（把握としての）は、同時に当の空間を描くことでもあり、したがって構想の働きにおける客観的な動き、ひとつの前進〔Progressus〕である。これに対して、多数性を思考内容の単一性でなく直観の単一性へと総括すること、したがって継起的に把握されたものをひとつの瞬間〔Augenblick〕へと総括することとは、ひとつの背進〔Regressus〕である。この背進は、構想力が前進するさいの時間条件を再び廃棄し、同時存在〔Zugleichsein〕を直観的なものにする。（KdU, B 99 [258-259]）

ここで言われているのは、こういうことだ——およそ時間の推移は、前進する表象作用のなかを止めどなく推移してゆく以上、ひとつの時間推移として規定されるためには、背進において再び現在化されねばならず、かくしてそれ自身は継起的でない直観、したがって時間的でもない直観にもたらされねばならない。そのような直観における総括、すなわち瞬間における総括は、カントによれば、

それゆえ（時間継起こそが内的感覚とひとつの直観との条件である以上）構想力の主観的な動きであり、この動きによって構想力は内的に暴力を加えるのである。この暴力は、構想力がひとつの直観へと総括する量が大きくなればなるほど、ますます目に見えるものとならざるをえない。

（KdU, B 99-100 [259]）

他に還元しえない時間化の構造としての（前に立てる）ことのなかで遂行される構想力の動きは、ここでの叙述によれば、前に立てる働きによる時間継起をとりまとめ、今において過去を、以後において以前を保存し、同時的でないものを同時的にし、ひとつの瞬間において直観にもたらそうとするときに、まさしく同じ構想力によって暴力を加えられる。ここで言われているのは、一方では、時間的延長の相次ぐ諸契機がひとつの継起関係において捉えられうるためには、同時に、それらの諸契機が当の時間的延長とは逆向きにとりまとめられねばならないということだ。ところが、この前進における背進において、構想力は自らに暴力を加える。このとき構想力は、自らの働きによって時間形成を——したがって自らの働きを——抑止することになるからである。他方で、このこと以上にカントの考察によって言われているのは、純粹な直観形式からの根源的な時間化としての表象作用が、およそ表象作用として、すなわち前に立てる作用として遂行されうるのだとすれば、そのようなものとして遂行されるそのつ

どに、この作用が自らの感覚——時間感覚——に逆行する背進でなければならぬということだ。時間が存在するために、時間が抑止されねばならない。時間感覚には反時間感覚が含まれ、時間化には脱時間化が含まれ、前に立てる表象作用には、より以前に向かって後ろに立てる作用が含まれ、したがって静止作用が含まれている。純粹な直観形式が働くまさにその瞬間に、この静止作用が当の形式を宙づりにするのである。

カントの考察に暗に言われているのは、時間を代償にすることでしか時間が存在しえないということだ。もはや時間が存在しないときにだけ、時間は存在する。しかし、この時間の逆説的な存在さえもが、ひとつの努力にとどまるほかない。同時的でないものを同時化するために、またしても時間が必要となるからである。つまり構想力は、勝手に背進方向をとることで自らに暴力を加えるというだけでなく、背進方向に前進してゆくことでさらなる暴力を自らに加えるのであり、時間に——すなわち自らに——暴力を加えるまさにそのかぎりでの時間の暴力を被るのである。カントは、次のように考察を続けている。

それゆえ、大きさの尺度をひとつの直観のなかに取り入れようとする努力〔Bestrebung〕は、およそ大きさの尺度を把握するにはかなりの〔merklich〕時間を必要とするので、主観的にみれば反目的的な〔zweckwidrig〕表象様式だが、客観的には大きさの評価のために必要な、したがって合目的な〔zweckmäßig〕表象様式である。そのさい、構想力によって主観に加えられる当の暴力は、それでも心の規定全体にとつては合目的であると判定される。

(KdU, B 100 [259])

ここでカントの言っている表象様式は、数多ある表象様式のひとつなのではない。それは、表象が心の自己触発

として——したがって時間発生として——働くときに、自らを直観として遂行しようと努力する表象が取るほかに唯一の様式なのである。この表象様式は、時間発生を中断させなければ時間を発生させることができないし、この中断のためにかなり、時間を必要とせねば時間発生を中断させることができない。このような二重の暴力が、たんに表象にだけ加えられるのではなく、およそ時間発生のために努力している表象能力そのものに、すなわち構想力に加えられる。この二重の暴力は、心にとつては非合目的である。これによつて心は促進されると同時に抑止されるほかないからだ。つまり、そのさい心は、感性の器官および生命力として賦活されるときにこそ麻痺させられねばならず、自らのうちに尺度を見出すときにこそ当の尺度を自ら破壊せねばならないからである。

時間が時間としてもたらされるためには、時間が抑止されうるものでなければならぬ。しかし時間を抑止することも、つねに不可能なままである。時間を抑止して確保しようとする構想力の努力を超えて、当の構想力による表象作用が働いてしまうからだ。したがって、時間は時間にとつて「非合目的〔unzweckmäßig〕」であり、表象作用は表象作用にとつて「非合目的」であり、表象能力・時間化能力としての構想力は当の能力自身にとつて「非合目的」である。時間は、いったん措定された〈前に〉から、さらなる以前へと背進しようとするなかで、いかなる〈前に〉をも超えてさらなる〈前に〉へと進んでしまい、表象のなかで当の表象を超えて進んでしまい、表象能力のなかで当の能力〔Yermögen〕自身を——その〈前に〉〔Vor〕も、可能性〔Mögen〕も——超越してしまうからだ。この「非合目的」な超越こそが時間なのだ。これが超越論的な直観形式と特徴づけられることは問題なしとするわけにはいかない。形式であるにしては、この超越には完結した統一性がない。この超越は、前進を続けるなかで、ひとつの直観になることがけつしてできない。当の前進がひとつの瞬間へと収縮することが、つねに阻まれるからだ。この超越は、客観的経験の可能化という意味で超越論的なのでもない。表象能力のなかでのその可

能化は、それ自体すでに当の能力の地平を超えてしまっているほかはなく、したがって超ツトウ超越論的な動きとして、自らに相応するなんらかの認識能力のなかで保証されることなどありえないからだ。時間は、ほかならぬ自らの源泉となる表象能力に過剰要求をしている。そして表象作用としてわれわれの全能力の根本構造を規定している時間において、表象能力は自らに過剰要求をしているのである。これによって、「直観における把握の総合」の基礎は——『純粹理性批判』の超越論的演繹において、純粹な直観形式としての時間の可能性を保証すべく、時間の諸契機の多様性をとりまとめるとされていた「把握の総合」(KrV, A96)の基礎は——すでに崩壊している。同様にして、把握の総合に伴うはずの再生産の総合も解消しているし、把握され再現化された時間契機それぞれの自己同一性を保証するはずの、概念における再認の総合も解消している。つまりは、時間構成に必要な根本構造の全体が解消してしまっているのである。カントの表象哲学にとつて、自らのうちにまとまったひとつの瞬間へと時間継起を総括する可能性など存在しえない。そのような瞬間があるとしても、まさにその瞬間に、つねにさらに前に立てられる——前もって立てられる——表象によって攫さらわれ、引き裂かれざるをえないだろう。時間とは——そのようなものがあるとして——まさに表象作用に走るこの裂け目であり、表象作用自身による表象作用の引裂である。およそ時間とは、テンプス・エクス・テンポレ [tempus ex tempore]・時間から出てくる時間、即興の時間]であり、テンプス・エクス・ラプトゥー・テンポリス [tempus ex raptu temporis]・時間の裂け目から出てくる時間]である。すなわち、表象作用・直観・概念・イメージから当の表象作用を切り離す裂け目から出てくる時間であり、表象作用の〈前に〉から出てくる時間であり、あらゆる〈前に〉を立てる作用も、安定した表象へと〈前に〉をとりまともめる作用も超え出る〈前もって〉としての時間である。表象という総合の構造と、定立的な存在の地平とのなかに、なおも保持されうるような時間ではない。

とはいえ、潜在的には無限な時間的延長をひとつの直観の全体性へと総括することが、いずれにせよ失敗するのだとしても、この失敗は、カントが強調しているように、主観的直観にとつてはたしかに反目的だが、「心の規定全体にとつては合目的である」(KdU, B 100 [259])。つまり直観能力の挫折は合目的なことであり、したがって美感的な判断能力の挫折も、この能力の基底である表象能力の挫折も、合目的なことである。しかし、すべての認識・欲望・感情の根本能力そのものの、このような不能力が合目的でありうるためには、この不能力が目に見え、暴力として加えられ、不快として感じられるのでなければならぬ。つまり、構想力のこの挫折さえもが、当の構想力の経験——反省的・超越論的な経験——となりうるのでなければならぬ。このときには構想力が自身から分離し、自身の不能力から距離を取りうるのでなければならぬ。つまり、構想力が自身とは別のものでなければならず、自身の他者性から自らを表象しうるものでなければならぬ。構想力が、自身の表象不能力それ自体さえをも表象しうるのでなければならず、これによって表象能力を超えて自らの表象作用を拡張せねばならぬ (KdU, B 101, 115 u. 124 [259-260, 268 u. 274])。要するに、構想力が「可能性」というカテゴリーの地平から立ち去り、そればかりか悟性概念の地平全体から立ち去らねばならないのだ。このときにだけ、表象能力は自身の挫折を不快として経験することができ、直観のもたらす感性的でしかない表象の快にこの不快を結びつけることができる。表象の時間の表象不可能性が、それ自身なおも表象可能である——しかし、それが表象可能となる唯一の審級は、表象作用のなかで表象されるものではなく、あらゆる表象における〈前もって〉のたんなる動きのなかしかない。まさしくこのことが、カントが書いているように、崇高なものの感情において発見されるのだ (KdU, B 100 u. 105 [259 u. 261])。これによって初めて、いかにして時間的綜合の挫折が「心の規定全体にとつては合目的」でありうるのかが明らかとなる。

崇高なものの感情の質とは、この感情が或る対象に対する美感的判定能力についての不快の感情であるということ、しかしそのなかでこの不快が合目的なものとして表象されるということである。このようなことが可能であるのは、主観に固有の不能力が、同じ主観の無制限な能力の意識を露わにするからである。つまり心は、前者の不能力を通じてでなければ、後者の無制限な能力を美感的に判定できないのである。(KdU, B 100[259])

無制限な能力、すなわち感性の諸条件に制限されず、したがって時間感覚の諸条件にも制限されない能力の意識への接近路が、心にはある。この接近路は「露わにする」[Entdeckung; 発見する]ことによって拓かれる。これには二つの経験、より正確には二つの感情が含まれている。第一に、ひとつの直観へと時間を総括することの「不能力」の感情である。第二に、この不能力の感情でさえもが当の総括への「努力」に対する制限を表わしているわけではないのだ、という感情である。この「努力」が挫折しようとも、この努力があるという事実を否認すべくもない。この努力が挫折するというまさにそのことによって、そしてこの挫折のなかで心の「震動」[Erschütterung] [KdU, B 98 [258]] や「狼狽」[Bestürzung] など「Verlegenheit」[KdU, B 88 [252]]、つまりは「否定的な快」が惹き起こされることによって (KdU, B 76 [245])、この努力が努力であることは争われないものとなるし、この努力そのものが、時間という無限なものをひとつの全体へと総括して考える能力のあることを証し立てている。表象作用の能力は、当の表象作用がいかなるときにも対象的な表象にはなりえないからこそ、当の能力の失敗によっても否定されえない。むしろ、時間のなかでの表象能力の呈示に失敗することによってのみ、当の表象能力が「露わに」され、「喚び起こ」され、あるいは「感じうるように」され (KdU, B 105 [262]) うるのだ。

あらゆる可能な不快を通じた向こう側にある快のなかに現われるこの能力を、カントは「絶対的全体の理念」の理性能力と呼んでいる (KdU, B 101 [260])。

この「絶対的全体の理念」において、あらゆる直観から——美感的理念におけるあらゆる直観からさえも——逃れる無限な時間経過が、ひとつの統一性にとりまとめられたものとして表象されている。この理念においては、「終わりのない前進の絶対的全体性の不可能性」(KdU, B 94 [255]) が、当の全体性の現実的な表象へと反転している。そこでは表象の時間の無限性が——この無限性を前にしては表象能力など無に等しいのだが——総括され、ひとつの瞬間となっている。つまり、時間継起における多様なものを「ひとつの表象に含」む「絶対的統一性」としての表象 (Krv, A 99) となっているのである。「絶対的全体の理念」とは、「総括された無限性」(KdU, B 94 [255]) としての瞬間の理念である。この理念は、たしかに表象の時間の無限性の「知性的な総括」ではあるが、だからといって非感性的なのではなく、むしろ超感性的な感情、つまり感性のあらゆる尺度を超えて感性的な感情である。この理念の働きのもとで、対象は「崇高なものとして、不快を介してのみ可能であるような快を伴って受け入れられる」(KdU, B 102[260])。したがって時間の非合目的性は、この瞬間の理念に対して合目的である。この理念において、「時間」という表象が救出されているのだ。とはいえ、この理念における時間の救出は、時間からの時間の救出であるほかない。この救出は、表象作用の発端となるたんなる〈前もって〉の意味での〈前に〉の救出であり、それ自身は無条件なものである時間という条件の救出であるほかない。つまり、これが時間からの時間の救出であるほかないというのは、この理念において時間が、時間のなかでの経過としてでなく、時間それ自体として守られているという意味においてである。

理性のアンチノミーという標題のもとで論じられている諸問題の場合と違って、崇高なもの議論のどこにおい

でも、現象領域を局限することは問題となっていない。そこでの問題は、むしろ現象性それ自体の諸条件を保証することである。その諸条件、すなわち純粹な直観形式としての時間と空間とが保証されないとすれば、感性和悟性との働きの認識にとつて拠り所とならないところでも認識の可能性を基礎づけるべく、絶対的全体という理性理念が介入してこなければならぬ。実際、崇高なものの感情において明らかとなるのは、第一批判ではあらゆる認識の働きの基底に置かれていた直観形式と悟性形式とが、互いに合致して形式的統一性をなすことができないということだ。ところが、この形式的統一性においてしか、直観形式と悟性形式とは、十全な超越論的直観形式を呈示することも、したがって十分な認識条件を呈示することもできないのである。悟性の数概念が妨げなしに無限へと前進している間には、この数学的前進についてゆき、この前進運動をひとつのまとまった表象へと総括しようとする直観の試みは、どうしても失敗せざるをえない。というのも、時間を構成するためには、表象作用において把握されたものを総括することが必要だが、そのような総合のためには、またしても「若干の時間を必要とする」(KdU, B 88 [252]) のであって、こうして時間表象の根源的综合を獲得するのに必要なこの「若干の時間」が、当の総合を無限に延期しうるからである。このような表象作用と表象の総括との非対称、数概念の前進と美感的な総括との非対称が、どれほど些細なものであろうとも、ここに示されているのは、感性和悟性との非対称である。この非対称が、「内的感覺」の表象作用を分裂させ、時間自身の表象可能性を超えて時間を延長させ、かくして対象認識の根本条件を遠ざけてしまう。表象作用としての時間発生に内在するこの非対称は、単一性・単位というカテゴリーの成就を妨げるだけでなく、量というカテゴリー分類全体の成就を妨げる。この非対称においては、およそ量に対応すべき直観が欠けているからだ。「それは、それ自身にだけ等しい大きさ〔量〕である」(KdU, B 84 [250])。これと同時に、表象の前進の総括されえぬ無限性によって、構想力の総合能力を超える過剰要求がされることで、

実在性と、それを含む質というカテゴリー分類とがやはり姿を消してしまふ。このとき対象の事象性 (realias phenomenon) (Kr.V. A 143 [auch: A 146, 166, 168 u. 265]) は、感じることの能力についての感情におこつて、かろうじて「否定的な呈示」(KdU. B 124 [274]) をされうるだけだからだ。同様にして、関係というカテゴリー分類は、構想力の分裂の感情としての崇高なものにおいて働きを停止させられてしまふし、対象認識の様相 (可能性・現存在・必然性) は、当の対象認識の諸条件が構成されるなかで、当の対象認識にとって「反目的的」(KdU. B 100 [259]) なものだけに遭遇することになる。こうして、表象の総合を超える表象作用の力によってカテゴリー全体が崩壊する。これとともに、時間構成における直観と悟性との照応関係は抹消され、心の自己触発は数概念の無限性によって触発の過剰要求へと駆り立てられ、この過剰要求によって心の触発可能性は姿を消してしまふ。したがって、崇高なものの感情が「感覚のあらゆる基準を超え」、「構想力の能力を踏み越えている」(KdU. B 92 u. 93 [254 u. 255]) とすることが意味しているのは、明らかに、第一批判が要求しているとは違つて「超越論的な時間規定」が「悟性概念の図式」としては働かえないということ、時間が直観と悟性とを「媒介する表象」としては働かえないということである (Kr.V. A 138 u. 39)。時間は、自らに関係してゆく表象作用、自らとひとつにまとまる表象作用の形式ではありえない。それゆえ対象認識の条件や保証となることもありえない。感性の能力の根本構造が時間だとされるが、時間においては表象作用と表象されたもの——把握・再生産・再認における——総括とが協働しない以上、時間が感性の能力へのあらゆる関係の外に出でしまつてゐることは明らかだ。時間の時間化が感性・悟性のあらゆる形式を超えていて、自らの源泉である能力さえも超える過剰要求である以上、時間にはいかなる拠り所もない。直観なしに数え続けることの過剰によって、時間がそれ自身すでに分裂させられ、感性的総合を超えて追いつて立って以上、時間は、表象作用の純粹な直観形式のなかで認識諸能力を媒介するこ

とができない。しかし、図式的機能である媒介能力が、表象作用それ自体の構造を規定し、およそ表象作用が表象作用であるかどうかを決定する以上、崇高なものの感情を惹き起こす時間形成の挫折は、同時に、表象作用の基本運動のなかでの表象作用自身の崩壊、およそ「自己」なるものの原構造の瓦解でもある。

時間発生のためには時間が必要である。それも、実際に発生する時間はどの程度の時間でもありえようが、それに応じて、そのつど発生する時間以上の時間が必要である。この時間構成における非対称性について、カントは二度にわたって記述している。ひとつは、ピラミッドとサン・ピエトロ大聖堂との観察からの引用においてであり（第二六節）、もうひとつは——われわれがこれまでに読解してきたように——無限な空間に直面しての時間規定の試みの分析においてである（第二七節）。どちらの場合でもカントが注記しているのは、諸表象を総括するのに必要な時間が、総括される時間表象よりも大きいということだ。ピラミッドの観察について、カントはこう書いている。

基底から頂点までの把握を完成するのに、眼は若干の時間を必要とする。この把握においては、後続する部分を構想力が受け入れてしまう前に、先行する部分がいつでも部分的に消失してしまい、総括はけっして完全にならない。

(KdU, B 88 [252])

これに続く諸節のしかるべき箇所でも、やはり問題となっておりのは、量の尺度をひとつの直観のなかに——すなわち、ひとつの瞬間のなかに——取り入れるには「かなりの時間を必要とする」(KdU, B 100 [259])と「こう」である。ひとつの完結した時間表象を構成するのに必要な時間が「かなりの」[merklich: 目立つ、際立つ]と形容されていることが意味しているのは、この時間もまた表象作用（前に立てること）の時間に属しているという

ことである。ところが表象作用は、ひとつの規定された時間幅という総合的表象をそのつど超えてしまい、それよりもあらゆる意味で「前に」進んでしまっている。表象作用の〈前もって〉はつねに、ひとつの表象に総括される時間よりも大きいし、表象作用の時間はずねに、これを前にしてはいっさいの大きさが——いかなる量をもとうとも——小さいものとして現われるほかないような大きさである。あらゆる時間量・空間量の構成には——その量が無限量とされるときでさえ——この時間が必要である以上、この表象の時間は、いっさいの表象された時間と違って、数学的に崇高なものについてカントが述べていることの唯一の時間的指標となっている。カントは、数学的に崇高なものを「端的に大きい (absolute, non comparative magnum [比較的にでなく絶対的に大きい])」と定義し、「量 [quantitas]」でなく「大きさ (magnitudo)」と呼ぶ (KdU, B 81 [248])。表象作用の「かなりの時間」それ自身は、端的に大きい時間ではないし、カントが「瞬間」と呼ぶ絶対的全体の時間ではない。そうであるためには、この表象作用の時間は「総括された無限性」(KdU, B 94 [255]) でなければならなかっただろう。ところがこの時間は、総括作用の時間として、あらゆる可能な総括を超えており、したがって時間の全体性の可能性の条件であるとともに、その不可能性の条件でもある。とはいえ、そのような不可能性の条件として作用しうるのも、この表象作用の時間が、時間綜合の可能化において働いているからにはかならない。しかも、この時間綜合こそが表象作用の時間のテロス——前に立てられたもの——であり、そこから表象作用の時間の努力も規定されている。すなわち、かなりの時間を必要とし、それまでに過ぎ去った時間以上の時間を必要とするような、時間綜合の努力が存在するのだとすれば、この先取りの努力それ自体のなかですでに、ひとつの総括された時間多様性という表象が働き、したがって瞬間の理念が働いていなければならない。かくして、時間の剰余——そのつどの剰余をなおも超えてゆく剰余——を表象するとともに、時間としてのひとつの全体を表象するという時間化の二重構造こ

それが、崇高なものの感情を惹き起こす当のものである。たしかにカントは、論述のどの箇所でも、表象作用の時間と崇高なものの感情との緊密な結びつきを指摘してはいない。しかしカントの叙述から明らかなのは、崇高なものについてカントが提示しているすべての規定が、時間化の無限性と時間の全体性との二重構造から発しているということである。

カントが「あらゆる観点において（いっさいの比較を超えて）大きい、すなわち崇高である」と呼ぶものは、以下のような状態にある。すなわち「われわれは、そのようなもののために、それに適した基準をそのものの外に求めることは許されおらず、そのものうちにだけ求めることが許されている。それは、それ自身にだけ等しい大きさである」（KdU: B 84 [250]）。表象作用の時間は、表象可能であるかぎりで最大の時間さえも超え、あらゆる前進の無限性も、前進するさいの背進の無限性も超えている。この時間は、超無限なものである。だからこそ、それ自身としてはまだ絶対的な大きさではない。この時間は、たしかに超無限なものではあるが、しかし総合へのたんなる努力として、瞬間の統一性にいたる手前にとどまり続けるからだ。それでも、まさにこのことによつて証し立てられているのは、この——いつか来たるべき——統一性から、顧みてこの時間自身が規定されているということである。表象作用の時間は、そのつどに達成される表象を超え、そのつどの表象のなかで獲得される感覚の基準を超え出ることではか、時間ではありえない。そして感覚をたえず前に推し進めるなかでだけ、あらゆる感性的なものに対して、その対象性の時間条件を与えることができる。だから表象作用の時間は、感性的なものの構成条件として、しかも自ら感性的なものに属していながら、そのつどに感性的である以上の構成条件として、少なくとも考えられうるものでなければならぬ。「崇高なものとは、それをたんに考えることができるというだけでも、感覚のあらゆる基準を超えた心の能力のあることを証示するものことである」（KdU: B 85 [250]）。現象における外延

的な無限性としてであれ、現象の力の内包的な無限性としてであれ、自然は、自らを総括するひとつの表象へとまとめあげられることなどありえない。当の総括の動きが、あらゆる総括された表象をなおも超え出てしまうからである。それゆえ、この自然の表象不可能性それ自体が、理念における当の自然の表象可能性を——否定的に——告示するものと考えられなければならない。同様にして、ひとつの総括された時間表象の発生に費やされる表象作用の時間は、考えうるかぎり最長の時間表象の連続よりもなお長く持続する。この剰余時間は思考において必然的なものではあるが、表象されるものではありえないし、表象されるものになることもありえない。それゆえ、この表象作用の時間は、自らの表象不可能性を、理念において自らが表象されることの表象として考えるように要求しているのである。そこからカントは、崇高なものをさらにこう定義する。「崇高なものとは、次のような（自然の）対象である。すなわち、この対象の表象は、自然に到達することの不可能性を諸理念の呈示として考えるようにと、心を規定する」(KdU, B 115 [268])。そのような呈示の第一の理念が、絶対的全体という理念である。われわれは、この理念を主観的に——表象することによって——考えざるをえないが、「これを客観的に呈示することはできない」(KdU, B 115-16 [268])。しかしこの呈示不可能性に示されているのは、知性的な表象、時間のひとつの全体という理念、つまり瞬間の理念にしか従うことのできない努力というものがあるのだ、ということである。

この瞬間は、時間のなかにあるのではない。とはいえ、この瞬間が時間のなかにあるのではないのは、この瞬間が時間それ自体であるからにはかならない。この理念の瞬間について明らかなのは、時間とはそのつどに時間の剰余であるということだ。すなわち時間とは、すでに過ぎ去ったすべての時間を超える時間、表象作用の前進それ自体である。それは、再生産において取り戻すこともできず、すでに達成された時間的関係にとどまることもできない前進、それゆえ表象不可能な前進それ自体である。その一方で、理念の瞬間については、以下のことも同時に明ら

かである。すなわち時間は、時間として、考えられるかぎり——瞬間とは時間以外のなにものでもない——けっして時間の剰余としてのみ考えられるわけにはいかず、つねに、ひとつの時間全体における、潜在的には無限ないっさいの剰余の切離、としても考えられなければならないということ、したがって切り離された時間、時間の絶対的なもの、〔Absoluum〕としても考えられなければならないということだ。この絶対的なものがあればこそ、あらゆる表象作用はそれ自身、本質的に切離作用・解放作用である。無限な時間的前進をひとつの瞬間の全体性へと総括しようとする「努力」が「無駄な〔vergeblich〕ものだとすれば〔KdU, B. 115〔268〕〕、この無駄さは、止めどなく時間化を続ける表象作用の結果〔Ergebnis〕であるだけではない。この無駄さは、無限な時間連続を犠牲にすること〔Hingabe〕であり、かつ瞬間という理念的時間を解放すること〔Freigabe〕である。この無駄さとともに経験されるのは、時間の無限な構成運動のなかで時間自身がたえず休止する——時間の諸表象が「消失する」とカントは言っている〔KdU, B. 88〔252〕〕——ということ、そして、まさにこの休止においてこそ、時間がそのつど新たに時間全体性のなかで動き始めるということである。絶対的全体の理念とは、すでに措定されたあらゆる条件から切り離された全体、つまり解放され独立した全体という理念であるほかない。したがって、この理念の能力とは、独立・自由の能力であり、自身によってしか規定されない表象作用の能力であり、表象作用の時間的能力であるほかない。この時間は、表象作用の時間である以上、表象作用がまったく自由に用いることのできる時間、つまりいっさいの構成された表象から自由な時間であり、時間の自由から発してくる時間である。この自由な時間——すなわち理念の時間、瞬間の時間——は、継起関係とその無限な継続との時間として考えられるわけにはいかなないのであって、むしろ、表象作用が自らの〈前もって〉以外にはいかなる範型もたずに始まる以上、このような表象作用の無条件性の時間として考えられねばならない。（先ほど引用した諸理念の呈示に関わる崇高なもの定義にカント

が加えている説明は、ここに述べられたような意味で理解することができる。カントはこう説明している。「文字通りに受け取り、論理的に考察するならば、理念というものは呈示されることができない。しかし自然の直観のためにはわれわれが自らの経験的な表象能力を（数学的にであれ力学的にであれ）拡張するならば、絶対的全体性の独立性の能力として理性が参与してきて、感覚の表象を諸理念に適合させようとする心の努力を——無駄な努力ではあるが——惹き起こさざるをえない」（KdU: B 115 [268] 強調は引用者）。

このような時間の自由の理念としての時間の理念について、カントは、第一批判において自由という世界論的理
念を論じる文脈のなかで注記を与えている。この注記が、第三批判における崇高なもの分析での思考の歩みをいっ
そう明らかにしてくれる。第一批判の当該箇所では、行為のもつ**睿智的な性格**、すなわち自由の理念のもとで働く
という性格が、すべての時間条件の外に別出される。しかしそれは、当の性格に時間的構造を認めないためではな
く、当の性格こそを純粋な時間化の性格として露わにするためである。

この睿智的な性格に関しては「……」以前とか以後とかは認められないし、あらゆる行為は、時間関係を度外視し
てみれば——時間関係のなかでは、行為も、ほかの諸現象に並ぶ一現象にすぎないのだが——**純粋理性の睿智的**
性格の直接的な結果である。つまり**純粋理性は自由に行為するのであって、自然の諸原因の連鎖のなかで、外的**
であれ内的であれともかく時間的に先立つ原因によって、力学的に規定されてはいない。〔……〕（KtV: A 553）

こうして、自由な行為が時間的連続から独立していることを強調した後、カントは、今度はこの自由に対して
積極的な規定を与える。

「…」この理性の自由は「…」出来事の系列を自らによって始める能力として、積極的にも特徴づけることができる。かくして、理性の自由それ自体のなかでは何ごとも始まりはしない。理性の自由は、自由意志によるいっさいの行為にとつての無条件な条件である以上、自らを超えて時間的に先立つ条件を許すことなどない「…」。(KrV, A 553:54。別の箇所では、この自由が「ある状態を自らによって始める能力」と言われている (KrV, A 533)。どちらの表現においても、この「自らによつて」は「スアー・スポンテ」[sua sponte]を翻訳したものだと考えてよいだろう。この「スアー・スポンテ」は、自発性〔Spontaneität〕の概念によつても再現されている。)

時間は、およそ時間として考えられるとするならば、時間の始まりとして考えられなければならない。つまり「出来事の系列」の始まりとして、したがつて時間ないし表象の系列の始まりとして考えられなければならない。だからこそ「それ自体のなかでは」——すなわち、すでに経過した時間系列のなかでは——「何ごとも始まりはしない」のであり、むしろ先立つ時間系列によつて条件づけられていない新たな時間系列が、自らの始まりのなかで、自らによつて拓かれるのである。時間が、それ自身とは別の時間のなかにある時間ではなく、したがつて別の時間によつて条件づけられていないとすれば、あるいは、時間的でないもののなかにある時間でもないとすれば——時間的でないものも、やはり時間にとつての条件ではありえないだろうから——時間は、無条件的であるという以外の在り方をするなどありえない。時間は、無条件なものであればこそ始まりでありえ、始まりであればこそ、潜在的には無限な継起関係の条件でありうる。こうして時間が始まりでありうるのは、時間が、始まるという以外の在り

方をしておらず、こうして始まりであるなかで切離されたもの・絶対的なものであり、かくして絶対的全体であるからである。瞬間とは、そのつど始まりの瞬間である。この始まりにあって、時間は、先行しているであろういっさいの継起関係から外に出ることそのものであって、そうした継起関係を規定しているいっさいの表象から解き放たれ、独立している。時間は、なにかの後に続くのではないし、後続関係・継起関係それ自体なのでもない。むしろ時間は、継起関係の秩序から自らを切離すること、したがって絶対的なものであり、自らの絶対性によってのみ始まりであり、自らの独立性によってのみ、来たるべき可能な継起関係を拓くことそのものである。

始まることそのものとして、時間は、生成・消滅を断ち切る切離作用であり、すでに生成・消滅したものを顧みないたんなる表象作用、前に立てることそのものである。絶対的な始まりとして考えられることでこそ、時間は、絶対的全体、すなわち瞬間として考えられる。こうした瞬間であればこそ、時間は、無条件に前に立てる直観の感覚として、未開拓の〈前もつて〉へと延びてゆくものとして考えられる。こうして自らによって、始まるからこそ、時間は、感性の自己触発として、つまりアド・ファケレ [ad-facere] として考えられうる。この働きには、いかなる感覚与件も先行しない。むしろこの働きのなかで、たんなる感性が、対象なき自らの〈前もつて〉へのインテンティオー [intention] として遂行されるのである。このような始まり、すなわち無条件な始まり、あらゆる時間内的な条件から解き放たれた作用が、自由の純粹な時間である。カントが自由を「理性の事実」と呼ぶとき、この呼び名が有限な理性の有限な自由を意味しているのだとすれば、無条件な始まりとしての時間は、自らの有限性を自らによって始める理性の事実——アフェクティオー [affectio] ——である。この時間は、たしかに、自らに対応するものを経験のなかにもたない純粹な超越論的理念と呼ばれてよい。しかし、これに対応するものがないということ自体が、まさにこの理念を考え、この理念のもつ切り拓く力を守り、思考によって新たな別の経験の始まり

とすることの必然性を示している。あらゆる経験と同じく、時間は、まずもって〈ない〉から出発せねばならない。自らによって始めることの瞬間、独立した自由な瞬間の理念として、時間とは、テンプス・エクス・ニヒロー・テンポリス [tempus ex nihilo temporis・時間の無から出てくる時間] である。時間は、エクス・テンポレという時間外性にほかならない。このような思想の手がかりを伝統的な時間表象に求めることはできない。ここでは時間の自己関係から、それも関係表象として、時間を考えることが試みられているからだ。つまり、時間をほかならぬ時間として——したがって時間外性の不可能性として——考えることが試みられているのである。

しかしカントは、時間系列の始まりを、たんに無条件なものでなく「無条件な条件」(KrV, A 554)と呼んでいる。これが条件づけるものとは、因果性の法則(自由が発するものであれ)に従う継起関係以外のなものでもありえないし、つまりは、いったん条件づけられて通用するやいなや当の始まりを宙づりにしてしまうものにほかならない。この始まりの能力、すなわち理性について、カントはこう書いている。理性は「人間のあらゆる行為において、すべての時間的事情のなかで現在のであり、同じものである。しかし理性それ自身は、時間のなかにあるのではないし、いわば以前にはなかった新たな状態に陥ることもない。理性は、そのような新たな状態に関して規定するものではあっても、規定されうるものではない」(KrV, A 556)。理性は、時間を始めるものであり、もって本質的に時間そのものである以上、たしかに自らは時間のなかにあるものでも、時間によって規定されうるものでもありえない。だから、「すべての時間的事情のなかで現在のである」という言回しにおける「現在の」という言葉は、つねに現前しているということではなく、新たな時間の始まりへと不断に発動し続けることを意味しているのだ、と解釈することができる。だとしても、ほかならぬ無条件なものこの不断性と、「同じものである」という性格——つまり、始まることの常住性——とは、なにかを制約して条件づけるという性格とほとんど両立しない。

この条件づけるものという性格こそ、カントが始まりに認め、また因果性の法則と結びつけてもいる当のものだ。けれども、理念の純粹な時間が無条件なものであってみれば、この時間は無条件なものの不断性でしかありえず、けつして条件づける働きの不断性などではないだろう。何ごとも始めない始まり、なんらの結果連鎖ももたらさない始まりなどというものは、たしかに表象不可能である。結果のない始まりなど、おそらく思考不可能でさえあるだろう。しかし——カントの崇高論を拡張していえば——この思考不可能性にさえ証示されているかもしれないのは、時間の始まりが、始まることをやめられない始まりでなければならぬということだ。とすれば、これが意味しているのは、時間の内的因果性など存在しないということである。時間は、規則に従って動くのではないし、始まりという絶対的な総合以外の総合を許さない。そして時間をもたらさうる結果は、認識にとつてであれ、実践的な行為にとつてであれ、思考・感情にとつてであれ、以下のことでしかありえない。すなわち、認識も行為も、思考・感情も、つねに繰り返し、そのつどあらためて、無条件な（つまり結果の連鎖と反復とさえをも宙づりにする）始まりであり、さまざまな他なる始まりへの始まり、他者たちの始まりであるほかないということだ。

始まるということそれ自体は、カントにとつては無条件な条件であるとともに、つねに、いかなる条件でもないということがありうるのでなければならない。それは、無条件なものでありうるものでなければならない以上、つねに無制約化・未規定化・脱条件化をもたらすものでもありうるものでなければならない。カントは、時間を認識の可能性の条件とし、行為を時間の無条件な条件とすることで、超越論的觀念論の企図全体を、時間の哲学として明確にしている。つまりこのさい〈可能にする〉——正確にいえば〈条件づける〉——という時間の性格が顧慮されているわけだ。しかし、時間化をもたらさずたんなる表象作用〔前に立てること〕における無条件な始まりを再発見することで、カントは、そうした脱不断化からの時間発生を発見する。そしてここに拓かれる空間において、時間は、

原因〔causa〕でも条件でも基底でもなく、むしろそのつど他なる時間の始まりという絶対的なものであるほかにいし、この絶対的なものは、そのような時間の始まりに——終わりにでなく——しかありえない。この始まりの時間、超越論的思考とは別な思考の始まりの時間でもあるのである。

註

『純粹理性批判』(KrV)からの引用は、ヴィルヘルム・ヴァイシェーデル版による〔Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft* (Werke in sechs Bänden, 2. Bd.), hrsg. von Wilhelm Weischedel, Wiesbaden: Insel Verlag 1956〕。『判断力批判』(KdU)からの引用は、カール・フォアレンターによる哲学文庫版による〔Immanuel Kant, *Kritik der Urteilstkraft* (Philosophische Bibliothek 39), 3. Aufl., hrsg. von Karl Vorländer, Leipzig: Verlag der Dürtschen Buchhandlung 1902〕。引用箇所の数値は、『純粹理性批判』については第一版(A)ならし第二版(B)に、『判断力批判』については第三版(B)に基づいて表記する〔『判断力批判』については、亀甲括弧「」を用いてアカデミー版全集第五巻の頁数も示す〕。

訳者附記

本稿は、本誌第八号に掲載された同題論文上篇の続きである。著者ハーマツハーの紹介については、上篇に付された「訳者附記」を参照されたい。

本論文においてハーマツハーは、『純粹理性批判』の時間論に現われる「Vorstellen（表象する）前に立てる）」という語に着目し、テキストに密着したきわめて繊細な読解の手つきによってカントの超越論的感性論を、関係規定としての時間産出の哲学へと練り上げている。カントの超越論哲学は、ハーマツハーによれば、表象作用（前方措置）を介した存在定立論（Onto-Theseologie）へと読み換えることができるのである。

しかしながら論文後半で明らかにされるのは、第一批判の客観的認識の構成が可能になる当の時間の基本構造が、第三批判の崇高論においてリミットに達し、「表象作用自身による表象作用の引裂」によって自壊してしまうという事態である。そこで追究されているのは、時間発生そのものに必要な過剰な時間、すなわち「瞬間」としての「自由の純粹な時間」にほかならない。それは、カントの超越論哲学が『判断力批判』という批判哲学の最終段階において浮き彫りにしていた時間の思考である。ハーマツハーはここに、自由な瞬間の理念としてのみ思考しうる「時間外」の時間の哲学、要するに「エクス・テンポレ」として時間そのものの絶対的な始まりを告げる思考の端緒を探り当てている。これは、超越論哲学自身の他者となるような、カントの秘められた時間論の萌芽なのである。

訳出にあたっては、上篇と同様、清水が訳出した草稿をもとに、宮崎が訳文全体を検討・推敲した後、さらに両者で確認作業を行なって完成させた。最後に、本論文の訳出・掲載をご快諾いただき、訳者の質問に丁寧な答えてくださったハーマツハー教授に、あらためて深謝申し上げる。〔宮崎裕助〕